

ある冬の、寒い晩のこと、ひとりの旅人が、かばんにお金をいっぱい詰めて、故郷に向かっていました。

川の渡し場まで来ると、旅人は、

「おうい、渡し屋、渡してくれ」とよびました。渡し屋は、

「やれやれ、こんな寒い晩に、渡すのか」と思いながら、小屋から出てきました。そして、かばんを手に取り、旅人を背負って、川を渡り始めました。

「重い荷物だねえ」と、渡し屋がいうと、旅人は、

「商売がうまくいってね。中はお金だから、濡らさないでくれ」といいました。渡し屋は、（これだけの金があれば、一生楽に暮らせる）と思いました。そして、川の深い方、深い方へと歩いて行って、真ん中まで来たとき、旅人をどぼーんと水に投げこんでしまいました。

渡し屋は、急いでうちに帰って、女房に、

「今、もどった。まあ、その戸を閉めてくれ」といいました。

「あんた、あわてて、どうしたんですか」

「じつはな、お客さんを川に放りこんで、金をたくさんとってきたんだ」

渡し屋は、そのお金を元手に商売を始めて、どんどん金持ちになっていきました。子どもも生まれて、幸せに暮らしていました。

七年ほどたった、あるあらしの晩、子どもが、

「お父さん、おしっこがしたい」といいだしました。渡し屋は、外に連れて出て、高い崖の所で、子どもを抱いておしっこをさせようと思いました。すると、子どもが、

「ここはだめ」といいます。そこで、渡し屋が、

「そんなら、どこがいい」ときくと、

「もうちよつと、そつち」といいます。

「ここか」

「もうちよつとそつち」

「ここか」

「そこはだめ。もつとそつち」

そうやって、どんどん暗い所へつれて行かせます。そのうち、子どもは、

「あのね、お父さん。七年前にね」といいだしました。

「ふうん」

「あの暗い暗い晩にね」

「ふうん。何があった」

「川の中へどぼんとすてられた」

渡し屋を見ると、抱いている子どもの足が長くなって、長い毛が生えていました。

「化け物だ！」

渡し屋は、とんで逃げました。化け物は、

「七年前の渡し屋、待てえ」といって追いかけて来ました。

渡し屋は、どンドンどンドン逃げましたが、化け物は、どこまでも追いかけて来ます。夢中で逃げていると、向こうに橋が見えてきました。

「あれは、化け物が渡れないというむみょうの橋だ」

渡し屋は、一生けんめい橋を渡りました。化け物は、行くことができず、

「残念だあ」と叫んで、消えてしまったということです。

村上郁再話

資料『蒜山盆地の昔話』稲田浩二・福田晃／三弥井書店